

『三葉集』

田漢・宗白華・郭沫若著

その4-1 「郭沫若より宗白華への手紙」(翻訳・訳注と解説)

原題:「郭沫若致宗白華」)

顧 文*

岩佐 昌璋**

Kleebatt by Tian Han, Zong Baihua & Guo Moruo

Letters to Zong Bai hua from Guo Moruo No. 4 - 1

With Annotation

by

GU Wen, IWASA Masaaki

(Received October 31, 2014)

【その4-1】

白華兄:

12 日のお手紙をすでに受け取りました。15 日の夕方に、僕にはまた一人の「子豚」【原文は「豚児」。男の赤ちゃん】が生まれました。泣けばいいのか、笑えばいいのか僕にも分からないほどです。古代ローマにおける最下層の市民 Proletarius¹たちは、子どもを産み、育てるほか、なにも国に奉げる資産を持っていませんでしたが、僕も本当に正真正銘の Proletarian²になったような気がします。「マルサスの人口論で言えば、君はどうやら「粗製乱造」の類になるね」³と寿昌兄に言われました。僕は「男子多ければ則ちおそれ多く…徳を養う所以(ゆえん)に非ざるなり」【男の子が多ければ心配事が多く、安らかな人生が全うできない】⁴という語を思いだしたのですが、自分でも自分の涙の湖の水を鼻の穴に灌ぎこませるほかありませんでした。寿昌は 19 日に来てくれましたが、わが家には、人手がなくて、しょっちゅう寿昌に頼んで一緒に炊事したりしていました。僕たちが食べたおかずは湯豆腐、大根の具のスープだけでした。19 日の午前、僕が台所で火を起し、お湯を沸しながら、シモンズの英訳によるヴェルハーレンの詩劇を読んでいる時でした⁵。ノックの音がしまし

* 東海大学経営学部観光ビジネス学科教授

** 九州大学名誉教授 日本郭沫若研究会会長

¹ ラテン語。無産階級。

² 英語。無産者。

³ トマス・ロバート・マルサス(Thomas Robert Malthus, 1760-1834【1766?】)。英国経済学者、人口論者。著作に、『人口論』【*An Essay on the Principle*】と『政治経済学原理』【*Principle of political economy*】等がある。

⁴ 『莊子・天地篇』による。「堯曰：多男子則多惧、富則多事、寿則多辱、是三者非所以養徳也」【男子多ければ則ちおそれ多く、富めば則ち事多く、寿(じゅ)なれば則ち辱(はじ)多し。是の三者は、徳を養う所以(ゆえん)に非ざるなり】福永光司『新訂中国古典選・莊子』外篇、朝日新聞社、1966 年 10 月刊によれば、文の意味は以下の通り。「男の子が多ければ、やれ馬鹿息子だ、やれ放蕩息子だと、まったくのびくびくもの。金持ちになれば面倒な事がふえ、長生きすれば恥のうわぬり、世間の人間が幸福の条件とするこの 3 つのものも、実は「徳」すなわち安らかな人生を全うするゆえんではないのだ」

⁵ シモンズが英訳したヴェルハーレンの劇作。シモンズ(Symons Arthur, 1865-1945)。英国詩人、

た。開けてみると、グレーのコートを着た面識のない痩せた青年が、左手にしゃれた黒いズックの鞆を提げています。右手で帽子を脱ぎ、僕に言ったのです。

ミスター郭？僕は田・・・

おう、田君！来たんだね！なぜあらかじめ電報一つ打ってくれなかったんだ？

どうして？僕は京都で電報を打ったんだが【補注1】！

ぜんぜん受け取っていないよ。

それはほんとにおかしいなあ！どうして届いていないのかな？

気が利かなくてすまなかった。疲れただろう、さあ二階へ、上がってくれたまえ。

これこそ、僕と寿昌兄と初対面の会話です。僕のアンナは産後ちょうど三日目でした。彼女も寿昌兄が来たと聞くと、すぐ蒲団から起きました。僕は相変わらず一階で火を焚き、ご飯を作っていました。火を見ながら、二階へ上がって、寿昌兄とお喋りしたり、また一階へ下りて、火加減を見るといった具合でした。二枚の牛肉を焼きましたが、なんと「真っ黒焦げ」になってしまいました。寿昌兄にご馳走した昼ご飯は、ただこの焦げた牛肉二枚——格別な味の西洋料理だけでした。

孔子は温伯雪子に会いたがっていましたが、会ったあと何も言わず、(弟子に)「(温伯雪子のような人物は)一目見れば道の体得されていることが分かる。言葉をさしはさむ余地などない」¹と評しました。またエマーソンがカーライルと会った時も、お互いに一言も発せず、二人の心がぴたり合い、互いに理解し合ったというこ

とです²。この二つのエピソードは僕のような浅薄で口下手な者にとっては、「自分の未熟を隠す」最も便利な道具のようなものです。寿昌兄は二階に上がるとすぐに、滔々と立て板に水のごとく雄弁に話しはじめました。僕はただ耳を澄ませ、拝聴するばかりでした。一言も口を挟む余地がありませんでした。もったいなかったのは、僕は、耳が遠いだけではなく、健忘症であり、その上、寿昌兄の方言【補注2】にも聞きなれていないので、聞き取れなかったところが沢山あったことです。聞き取れた言葉もすぐに八、九割は忘れてしまいました。僕は本当に頭がよくないです。本当に使い物になりません！ただ寿昌兄がこう言ったのは覚えています。将来 Dramatist【劇作家】になりたい、そして Critic【批評家】になりたい³。そのうち Maeterlinck【メーテルリンク】を紹介したい、彼の『青い鳥』を翻訳したい。また英国の Oscar Wilde【オスカー ワイルド】を紹介したい⁴。彼はそう言いながら、鞆の中から英訳『ハイネ詩集』を取り出し、一緒にハイネを紹介しようと僕に言いました。彼の話は僕はすべて賛成ですし、なおかつ期待もしています。しかし、僕の自分自身の志望はやはり作家になりたいということだけです。僕自身が自分には批評の能力などあまりないとみえています。彼はまた言いました。京都に途中下車した時に、厨川白村博士を訪ね、⁵大変有益な教訓を得た、と。寿昌兄は厨川氏が言った「凡そ創作者たる者は、ただ全力を創作に集中すべき

批評家。詩集に、『シルエット』【Silhouettes】、論著に『象徴主義の文学運動』等がある。ヴェルハーレン (Emile Verhaeren, 1855-1916)。ベルギー詩人、劇作家。劇作に『夜明け』【Les Aubes】、詩集に『幻想の村々』【Les heures claires】等がある。

¹ 『莊氏・田子方』による。原文「目撃而道存、不可以容声」(目撃して道存す、声を容れるべからず) この訳は福永光司(前出)を援用している。

² ラルフ・ウォルドー・エマーソン (Ralph Walde Emerson, 1803-1882)。アメリカ人。哲学者、エッセイスト、詩人。著作に『論文集』【Essays】、『英国の印象』【English Traits】等がある。トーマス・カーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881)。英国人。哲学者、歴史学者、作家。著作に『英雄と英雄崇拜』【On heroes and Hero Worship and the Heroic in history】等がある。

³ 英語。批評家。

⁴ ワイルド (Oscar Wilde, 1854-1900)、英国の劇作家、唯美主義の提唱者。著作に『サロメ』、『ウィンダミア婦人の扇』【Lady Windermere's Fan】等がある。田漢は『サロメ』を1921年3月の『少年中国』第二巻第九期に翻訳・発表している。

⁵ 厨川白村 (1880-1923)、日本の文芸評論家、京都帝国大学教授。著作に『苦悶の象徴』、『象牙の塔を出でて』、『文芸思潮論』等がある。

だ、評論家が褒めようが貶(けな)そうがそんなことに構うな」という言葉にとっても感服していました。

昼ご飯を済ませた後、僕は和(かず)【補注3】を連れて、寿昌兄と散歩に出かけました。海岸に着くと、寿昌がいました。

ここが博多湾？君が和ちゃんを抱いて海水浴をしたのもここかい？【補注4】

僕は寿昌に話しました。

この博多湾には僕たちにとって、やはりもう一つとても記念すべき事実があるんだ。439 年前、元軍が二回目の倭【昔の中国人が日本を呼んだ語。やや侮蔑の気分を含むか。】国討伐にきた時、台風に遭い、全軍十万余りの人、四千隻の「楼船」【2階造りの船・戦艦】が一夜にしてすべてここで沈んでしまったんだ¹。このあたりの史実は、僕がはじめて福岡に来たとき、まさにこの海岸で聞いたものだ。小学生の集団が、この砂浜でね、身振り手振りで話している一人の教員を囲んでいたんだ。僕は近寄って聞いていたが、彼に本当に感謝したいのは、同時に彼は、僕に限りない敵愾心も呼び起こしてくれたことだよ。この海岸から遠くない所に東公園というのがある。公園の中には、二体の銅像があり、一体は、倭国討伐当時の日本の上皇亀山で、一体は、日蓮和尚だ。二人とも当時の戦争と関わりがある。この他にもまた元寇記念館と元寇史画館がある。僕は両方とも見てきた。元寇記念館には、弓、箭、槍、矛、兜、鞍絆などの遺物がけっこう沢山あった。僕はそれらを見ながら、ただ杜牧之の『赤壁』詩を連想しただけだったがね²【補注5】。

¹ 1280 (元代至元十七年) 年、元の世祖クビライが範文虎らに命じて、十万余りを率いて日本に侵攻してきた。次年度七月に、日本の平戸島に侵入した。『新元史・日本伝』の記載によると、「八月甲子朔、颶風大作、(元軍)戦艦皆破壊覆滅」【八月の甲子朔、颶風が大におこり、(元軍)の戦艦は皆な破壊され、覆滅し】とある。思うに、文中では四百三十九年前と言っているが、精確には六百三十九年前とあるべき。

² 即ち、杜牧 (803—約 852)、京兆万年 (今陝西西

僕たちは海岸に沿って行き、医科大学【補注6】を通り抜けました。裏門から、まっすぐ、表門に通じています。さらに通りを横切り、東公園に入りました。公園の中は一面松林で、林の中に高く聳え立っているのが亀山の銅像です。「あの銅像の姿は郊祀大礼服【天の神を祭る時に着る礼服】を着た洪憲皇帝に似ている³。低い身丈でよろよろ歩く姿が頗る似ている。」と寿昌が言いました。銅像の台に登り、周りをぐりと見渡すと、ただ青々とした松海ばかりでした。北面には亀山と並んで、頭が禿げ、背が曲がっているのが日蓮の銅像でした。二体の銅像は、一体は大きくて、一体は小さい。ただ残念なのは「東風が、元軍の便に味方しなかった」ということです【補注5を参照】。亀山像の脚元の正面に一つの石碑があり、「敵国降伏」と書いてあります。寿昌が言いました。「これは「敵国が降伏に来る」のか、それとも「敵国に降伏する」のか」——日本語の読み方に照らせば、両者とも読めます。僕はただ、「貪天之功以為己功」【天の功を貪り、以て己の功と為す】(台風による自然 [= 天] のおかげで元軍が全滅したこと [= 功績] を、自分の手柄にしかただけだ)と一言言っただけでした⁴。

今回、寿昌の来訪は、あいにくアンナのお産の直後だったので、彼につきあって思う存分遊ぶことが出来ませんでした。本当にすまないことでした。20 日、寿昌が起きたのは頗る遅い時間でした。食後僕はまた火を起し、湯を沸かして、赤ん坊を沐浴させようとしていました。寿昌は二階で半日間、手紙の原稿を整理していました【『三葉集』の編集作業をしていたのである】。先日、『少年中国』(詩学研究号)を拝領いたしました。寿昌は出発前に、まだ受け取っていませんでしたので、とても喜んでいました。彼は、あの長篇作を自分の原稿と何回となく繰り返し対照し読み返していて、何回繰り返ししていたかも分からないほどでした【補注7】。僕から見る

安) の人。唐代詩人。著作には『樊川文集』がある。

³ 袁世凱 (1859—1916) を指している。字は、慰庭、河南省項城の人。辛亥革命の成果を盗み取り、帝政を復活させた。1916 年 1 月 1 日にて民国五年を洪憲元年に改めた。

⁴ 出典は、『左伝・僖公二十四年』による。

と彼の心理状態はまさに「Unschuldig」です¹。精神も肉体もそれを生み育てることは同じく可愛いものです。文字は即ち作家の愛児です。

午後、僕たちは『ファウスト』の前部をすこし読んでみました。寿昌は **Strasse【往来】** から **Marthens Garten【マルテの庭】** までの幕が好きで²、僕は **Am Brunnen【井戸ばた】** 以後の幕が好きです³【補注8】。二人の好みが違っていたことが見取れましたが、それは僕たちの境遇の違いにもあります。僕は **Zwinger** の一節【補注9】を読むと⁴、いつも涙を流さずにいられません。先日僕は詩を一首つくりました。

涙の祈禱

Wer fühlet

Wie Wühlet

Der Schmerz mi im Gebein? Goethe⁵.

獄中の葛涙卿【グレートヒェン】(Gretchen)⁶!

獄中の瑪尔瓜涙達【マルガレーテ】!

¹ ドイツ語。Unschuldig=純潔の

² ドイツ語。ドイツ語。「往来」から「マルテの庭」まで。即ち『ファウスト』の第一部の第11節から第16節まで。

³ ドイツ語。「井戸ばた」。即ち、『ファウスト』の第一部の第17節。

⁴ ドイツ語。「街の外廊の内がわに沿った場所」【城壁に囲まれた中世の都市で、外壁と、その内側にある市の壁やと堀との間にある空き地。『ファウスト』の第一部の第18節。『世界文学全集』第三巻 高橋健二訳 河出書房 1989年を参照】

⁵ これはゲーテの『ファウスト』第一部『Zwinger』【第一部の第18節。意味は前ページ注7参照】でグレートヒェンが聖像に向って歌った詩の一節。郭沫若は次のように翻訳している。

わたしの心の中

骨髓まで貫通するこの苦悩

誰に分かるのでしょうか?

⁶ 葛涙卿【グレートヒェン】と次の文の瑪尔瓜涙達【マルガレーテ】は、皆『ファウスト』第一部の主人公の女性 Margareta Gretchen の音訳である。グレートヒェン (Gretchen) は Grete の愛称である。後に郭沫若は葛涙卿【グレートヒェン】を甘涙卿と訳し、瑪尔瓜涙達【マルガレーテ】を瑪甘涙と訳している。

君でなければ、僕の心中の悽愴は分からぬ、
君でなければ、僕の心中の痛悔は分からぬ。
以前君が流していた涙が……
僕の目に流れてきた。

流せ! ……流せ! ……

温泉のような涙よ! ……

早く廬山の滝のように勢いよく流れ落ちよ!

早く黄河や揚子江のように激しく流れ去れ!

洪水のように、海のように早く

涙よ! ……涙よ! ……

瑪瑙のような……赤葡萄酒のような……涙よ!

早く僕の生まれてこのかたの穢れを洗い流せ! ……

早く僕の心中に突き刺さっている利剣を取り除け! ……

早く僕の全身に燃えて上がっている烈火を消止めよ!

涙よ! ……涙よ! ……

僕を溺死させてくれ! ……溺死させてくれ!

獄中の葛涙卿【グレートヒェン】!

獄中の瑪尔瓜涙達【マルガレーテ】!

以前君が流していた涙が、ああ!

僕の目に流れてきた。……

僕……僕……僕も獄中へ行きたい!

法律上の制裁など何でもありません、社会的な制裁も大したことではありません、最も苦痛なのは、良心の制裁です。グレートヒェンは彼女の良心に忠実であるため、その母を殺し、その子を沈め死なせることはできても、終に獄中から逃れることはできなかったのです【補注8参照】。Ist sie gerichtet? Ist sie gerettet?⁷

⁷ ドイツ語。彼女は裁きを受けたのか? 彼女は救われたのか? これは『ファウスト』第一部最終幕『監獄』の終わりにメフィストが詠った2句の詩。【補注11】

夜、松原を歩き、沢山の話をしました、多くは憶えていません。最後に、話題が松井須磨子に及び、僕は、彼女の人生は芸術化されたものだと言いました【補注10】。家に着く頃、寿昌が口の中で詩を吟じるように言いました：「われわれ互いの感情が一致した時だった」。

21 日 晴れ——連日天気良く、遊びに出かけるのにぴったりでしたが、しかし僕の病気でとうとう何処へも行けませんでした。午前中、一緒にハイネの詩を読みました。彼は *An dem stillen Meeresstrande*¹ が好きでした。僕は二年前に訳していますので、それを下に書いてみました。

海浜 悄然と静か
夜 すっかり深くて
月 雲間から こぼれ
海 名月に向って 心のうちを話す

「あそこのあの男
バカになったのか？それとも本当に恋をしてるのか？」

あの男はどうしてあんなに悲しみ、またあんなに喜んでいるんだ？

明らかに喜び、同時にまた悲しんでいるが。」

明月はにっこり 微笑んで、
澄んだ綺麗な声で言う：
「あの方はバカになったんです、また恋をしているんです。」

しかも、その上また詩人でもあるんです。」

彼のこの詩が僕も当然好きです。しかし、僕がもっと好きなのは『帰郷集』中の第 16 首です。

海洋の水は
朦朧とかすんで夕陽を映している
僕たちは、漁師部屋に坐っている
何も言わず もの悲しく

夕もやが立ち上り 海の潮が漲り出す
白い 鴉が あちこちと飛びまわる
愛にあふれる君のふたつの瞳から
玉のような涙が流れたす

玉のようなあふれる涙が 君の掌に滴り落ち
僕は君の膝の上に跪く
君の白い玉のような掌から
涙を呑みこみ、五臓まで浸みこませる

その時から、僕の身体は憔悴に向い
僕の靈魂は愛のために死んだ——
不幸な夫人よ！
その涙で僕を毒殺したのか。(5 年前の旧作)

詩の主要成分はどうしても「自我の表現」でなければならぬものです。ですから一人の詩を読む時には、その人を知らなければいけないのです。ハイネの詩は彼の一生の実録で、彼の涙の結晶だと言えます。寿昌は僕と一緒にハイネの詩を紹介したいと言いますが、僕はハイネの詩が中国に訳されたら、誤解を招きやすいと危惧しています。恐らく淫猥を教える作品だと言う人が出るでしょう。しかし実は僕から見ると、ハイネは愛情に忠実で、我が国の所謂「弦を弾いて飛ぶ鴻を見送る」【愛情などを越えた世界にいるふりをする】一部の道徳家たちとは一概に論じられません²。僕としてはハイネが venereal disease で死んだとしても平気なのですが。

—— おう、海的生活！気分がいいね！

寿昌は晴海を見渡しながら、このように何度か声を上げて叫んでいました。僕は彼が血が頗る騒ぎ、腕が鳴ってるなと思いました。僕は彼と海辺の砂浜に坐り、和も僕たちの側に坐っていました。太陽はすでに西に

¹ ドイツ語。静寂の海濱。

² 出典は、晋代詩人嵇康の『兄秀才公穆入軍贈詩十九首』の十五首に「目送歸鴻、手揮五弦、俯仰自得、游心太玄」【帰鴻を目送り、五弦を手弾き、俯瞰、仰望が自ら得る、心を太玄に遊ぶ】による。

傾き、一面鏡のように平らな海波の上に映えて、燦爛と輝いています。

寿昌が言いました。「僕は新しい字を造ろうと思う。近頃女性の第三人称には「她」という字を使っているが、男性にはこれまで通りに「他」を使っている。不平等すぎると思うんだ。男は人だが、女は人ではないというのかね？それで僕は「他」という字の人偏を「力」に改めてみようと思うんだ。男という字から「田」を省いたものだ。僕は言った以上、必ず使ってみるよ！」【補注 11】

僕も言いました。「実際には、必要ないんじゃないかい。男女の権利の平等も、必ずしも、これらの枝葉の枝葉の問題に意を用いる必要はないよ。文字はただ簡単明瞭、意が伝わればいい。「她」という字が生まれたのもこの意味に合致している。君のようにあら捜しをしたら、「也」という字の偏も「了」という字に改めなければならなくなる。」

以上は、21 日午後の僕たちの「海辺の談話」です。僕たちは、風呂に行くのですが、銭湯はまだ開いていないため、ついでに海岸まで行って、座り込んだのです。

—— 行こう、銭湯はたぶんもう開いてるよ。

道端に Kleeblatt (三つ葉) の若草の小さな群生地がありました。まるで Emerald のように見えました¹。寿昌が下駄を脱いで、素足で草花の中に跳びこみました。僕は言いました。「君、それは Egoism の表れだよ²。好きなのに、何でわざわざ踏みつけにするんだ？」

22 日。雨。寿昌が手紙の原稿を整理し終わりました。名前をつけてくれと言うので、僕は昨日の「三つ葉」のことを思い出しました。僕の机の上にちょうど一冊の『若きヴェルテルの悩み』(Das Leiden des jungen Werthers) が置いてありました³。寿昌はすぐさま一篇の序文を作りました。たぶん貴方ももうご覧になったでしょう。寿昌は僕たちの手紙とゲーテの文字と同列に

論じています【補注 13】。僕自身、心中、一種、僭越だという気がします。また寿昌が訳している『ゲーテ詩の思想』にある「萊茵府」【Rhein・ライン】は leipzig の誤りです⁴。彼の文章に引く僕の訳した詩にも、ダメなものが幾つかあります。もし発表する時には、貴方に改訳、或いはご自分の考えで書き変えてくださるのがいいと思っています。

『若きヴェルテルの悩み』は、私には非常に中国語に訳してみたい気持ちがありますが、どう思われますか？僕が寿昌兄に言っている「ゲーテの研究会」はただ一つの提案に過ぎず、また組織づくりなどしているわけではありません【補注 14】。僕の本意はゲーテの傑作を一つ一つ中国語に翻訳して、徹底的に紹介するということです。このような事業は到底一人の力ではやり遂げられません。だから同志達を集め、仕事を分担して、各人が作ったものを交換して生産性をあげ、効率と成果をあげるようにしたいのです。ゲーテ作品の中から各自で自分の得意な作品を分担して翻訳していけば、二年もかからない内に、ゲーテの全作品を中国に移植することができると思います。日本の学術界ではこのような企画が特によく通用しています。例えば、トルストイ、ドストエフスキー⁵、オスカーワイルド、マルクス⁶、仏教經典と『漢文大成』⁷などは、すべて衆知を集め、大勢の力を集め、編集翻訳したものです。僕たちは、叢書を編集するのに、最もいいのはこのやり方をとることだと思います。——ここまで書いたときに、鶏が鳴きました。明日また続きを書きます——

20 日の夜、僕たちが松原の中で話したことについて、一部をまた思い出したので、続けます。寿昌が僕に聞きました。「結婚した後も、恋愛は継続できるものだろうか？」僕は、「結婚は恋愛の葬式だよ」と

¹ 英語：緑宝石【エメラルド】。

² 英語：利己主義

³ 即ち『少年維特の特煩惱』【若きヴェルテルの悩み】

⁴ ライプツィヒ、ドイツの都市。

⁵ ドストエフスキー (1821-1881) ロシア作家。著作に『虐げられた人びと』、『罪と罰』と『貧しい人びと』等がある。

⁶ 即ち、マルクス。

⁷ 即ち、『国訳漢文大成』。日本で、中国古代文化典籍一部を集め、翻訳したもので、凡そ四十冊がある。国民文庫刊行会発行。

答えました。寿昌も「ある人は、結婚は恋愛の墓場だと言っているよ」と言いました。そして続けて彼がまた言いました。自分は現在研究中で、もし良い方法がなければ、結婚したくないのだ、と。僕も言いました。永遠に結婚せずにいることができ、ずっと純粋な愛の心境を保てるなら、最も理想的だね。結婚したら、互いにどうしても不自由になる。ここまでならまだ解決も簡単だが、子供ができたらもっと不自由になる。このレベルになると、まったく解決の方法がない。幼い子供を「公」（社会全体）で育てるのは、児女の感情教育の面で恐らく大きな欠陥を生じることになるだろう。人間の世から、もし感情というものを取り去ってしまったら、Sahara¹の大砂漠になるのではないだろうか？自分がそれを知るのが大変遅かったことを悔いているよ。

未完待続

補注

本文は『三葉集』に収める、1920年3月30日付、郭沫若の宗白華宛最後の書簡の翻訳の前半である。底本、注釈は前回と同じで、『三葉集』（田漢・宗白華、郭沫若著 上海書店刊行 1982年6月）を底本とし、脚注部分は『郭沫若全集』文学篇 第15巻（人民文学出版社 1990年7月）の孫玉石（北京大学教授）注に従った。ただし、一部内容を改めたり、増やしたりした箇所があるのも、前回と同様である。

本文中、背景の説明が必要なものを以下に「補注」として掲げておく。

1. 田漢は博多の郭沫若を尋ねる途中、京都に下車し当時京都大学教授として名声をはせていた厨川白村を自宅に訪ね面会している。電報はこのとき打ったのであろう。
2. 田漢は湖南省長沙の出身。郭沫若は四川省樂山の人。それぞれに独特の方言をもつ。中国語の方言差は語彙や文法よりも音韻体系の差異に基づくから、二人が方言丸出しで会話したとすれば相当困難があっただろう。

3. 長男の和夫。原文は「阿和」で「カズちゃん」といったニュアンスになるが、ここでは和(かず)と訳す。この直後、田漢が「君が和ちゃんを抱いて海水浴をしたのもここかい？」と言っている「和ちゃん」の原文は「和児」。郭沫若の作品では「和児」として出現する。
4. 郭沫若の詩「抱児浴博多湾」（1919年9月11日『時事新報』副刊『学灯』発表、『女神』所収）を指している。この詩は天津で発行されていた日本語雑誌『日華公論』に翻訳掲載され、『三葉集』所収の田漢の郭沫若宛て書信（1920年2月29日付）によれば、田漢はそれを読んでいた。
5. 杜牧の「赤壁」の原文と訓読（訳者）は以下の通り。

折戟沈沙鐵未銷，自將磨洗認前朝。東風不與周郎便，銅雀春深鎖二喬。（折れし戟（ほこ）沙に沈み、鐵未だ銷（さび）ず、自ら磨洗するを將（も）って前朝を認む。東風周郎の便に與（くみ）せずんば、銅雀春深くして二喬を鎖（とざ）さん。

赤壁の戦いは『三国志』で最も有名な戦闘場面の一つ。天下統一を目指す曹操軍とそれを阻もうとする劉備・孫権聯合軍が揚子江流域の赤壁で対峙する。劣勢の劉孫聯合軍は下流から火攻めの計で上流の曹操軍を攻める。折から奇跡的に吹いてきた東南風の助けを借りて上流の曹操軍の船団を焼き払い、勝利を収める。周郎はこのときの聯合軍の司令官・周瑜。二喬は姉妹。姉の喬は呉王孫権の兄・孫策の妻、妹の喬は司令官・周瑜の妻だった。もし東風が吹かなければ、敗北して喬姉妹は捕えられてしまっただろう、というのがこの詩の大意。

郭沫若の意は日本軍が元軍に勝利したのは、むしろ、たまたま襲来した台風のおかげ、という感想を述べることにある。その視線は日本の勝利に冷淡で、「決して日本が強かったわけではない。単に台風が来たという偶然に味方された僥倖の勝利にすぎなかった」という観点に貫かれている。「敵国降伏」について田漢に対して「貪天之功以為己功」と言ったというのも、同じである。後、彼はわざわざ元寇の防塁をみるために福岡郊外の今津を訪れて

¹ 英語。サハラ。北アフリカに位置する。

いるが、そのことを記した「今津遊紀」(1922)でもこの「赤壁」を引いて同じ感想を漏らしている。当時彼がおかれた環境(日本人の中国蔑視)とかかわりがあるだろう。

6. 九州大学医学部は前身が 1903 年創設の京都帝国大学福岡医科大学である。1911 年九州帝国大学設立に伴い九州帝国大学医科大学となり、1919 年 4 月に九州帝国大学医学部となった。郭沫若は前年の 1918 年 9 月に岡山の第六高等学校から入学してきたが、そのときはまだ医科大学だった。この手紙の書かれた時期には医学部と改称されているが、郭たちにとっては医科大学の方が呼び慣れた名称だったのであろう。

7. 『少年中国』については本翻訳シリーズの『三葉集』(その 1) 52 頁(本紀要第 5 号、2012 年)の注に記したが、1919 年 7 月少年中国学会の機関誌として創刊、24 年 5 月停刊。田漢は 19 年には少年中国学会に入会し、創刊号に「平民詩人惠特曼的百年祭」というホイットマン論を発表、郭沫若の注目を浴びている(『三葉集』20 年 2 月 15 日、郭沫若の田漢宛手紙、また宗白華宛 20 年 1 月 18 日付手紙)。『少年中国』はふたりにとってそういう縁のある雑誌だった。田漢は 20 年発行の第 1 巻 8 期、9 期に中国文 6 万字に及ぶ長編論文「詩人と労働問題」を連載で発表していた。8 期は 2 月 15 日刊行、9 期は 3 月 15 日刊行である。田漢が郭宅を訪れた 3 月 19 日には、まだ第 9 期は届いていなかっただろうから、田漢が見たのは第 8 期だっただろう。彼はそれを何度も繰り返しチェックし、その姿を郭沫若は「unschuldig」(子供のように純真、無邪気)と評している。なお、第 9 期には田漢訳「歌徳詩中所表現的思想」と、郭沫若の『「歌徳詩中所表現的思想」附白』が掲載されている。田漢の訳文中のゲーテの詩のうち 11 首は郭沫若が訳したものだった。

8. 『ファウスト』第一部は以下のような出来事から成る悲劇である。老学者ファウストが悪魔メフィストフェレスと、現世のあらゆる快楽と悲慘を体験する契約をする。若返ったファウストは、街で

みかけたグレートヒェンに一目ぼれし、彼女と肉体関係を結ぶ。そして彼女と床をともにするために、グレートヒェンに言って母親に睡眠薬を飲ませ、分量を間違えて死なせてしまう。グレートヒェンは彼の子供を身ごもるが、処置に困って生まれた子を川に沈めて殺す。ファウストも妹の不行跡を聞きつけてやってきた兄を殺す。グレートヒェンは、捕まり牢に入れられ、自分の罪ぶかさを恐れ気が狂う。それを知ったファウストはメフィストフェレスとともに救出にむかうが、彼女から拒否される。

田漢が好きだという「往来」から「マルテの庭」までは、ファウストがグレートヒェンに一目ぼれし、グレートヒェンの方も彼に夢中になり、二人が愛し合うまで、いわば恋の上昇期を描いている。一方、郭沫若の好む「井戸ばた」以後は、この恋愛が悲劇に転じ、二人が罪を犯し、破滅に向かう過程である。

9. 「Zwinger」(高橋健二訳、河出世界文学全集 3、1989 年)は「町の外郭の内側に沿った場所」としている。第 16 節に相当する。この節はグレートヒェンが聖母マリアに恋によって生じた罪(ファウストとの肉体関係、母殺し)に身をよじり、良心の苦痛から救ってほしいと祈る場面である。

10. 松井須磨子(1886-1918)は言うまでもなく日本最初の近代劇女優である。「坪内逍遙のつくった文芸協会第一期の女優となり、『ハムレット』のオフィェリヤ、『人形の家』のノラで好評、荒削りな野性味と感傷性をもつその演技力は新劇女優の第一と称された。二度の結婚歴があったが指導者島村抱月と恋におち、1913 年文芸協会解散とともに芸術座をおこし新劇の普及に尽くした。」(川副国基「松井須磨子」『日本近代文学大事典』講談社、1984 年)というのがその評価である。芸術座の看板女優としてオスカーワイルド、イブセン、メーテルリンク、チャーホフ、トルストイなど多くの近代劇に出演し、国民的女優として知られた須磨子は演劇に志のあった田漢らには親しい存在であったろう。その須磨子のパートナーだった島村抱

月が、1917年スペイン風邪で死ぬ。悲観した須磨子は18年1月芸術座の本拠地・藝術倶楽部楽屋で首つり自殺し、抱月の後を追った。それは当時社会を震かんさせた大事件で、新聞各紙はこぞってその死を報じた。田漢たちには強い印象を与えたことは想像に難くない。事件が起こってすでに1年余りが経っているが、郭と田にとってはまだホットな話題たり得たのであろう。

11. 孫注には問題がある。第一部最終幕『監獄』は次のように終わる（高橋訳）。

「メフィスト あの子は裁かれた！」

声（上の方から）救われた！

メフィスト（ファウストに）こちらに来なさい！（ファウストと共に消える）

声（内部から、しだいに消えるように）ハインリヒ（グレートヒェンはファウストをこう呼んでいる）さん！ハインリヒさん！」

孫注は「裁かれた」「救われた」をともにメフィストの語としているが、ここは、メフィストが「あの子は裁かれた！」と言ったのに対し、天上から「（いやそうではなくて）救われた！」と反駁する声とする。つまり、別々の二つの声なのである。それに対し、郭沫若はグレートヒェンは果たして裁かれたのか？救われたのか？と疑問を投げかけているわけである。

12. 中国語で女性の第3人称を指す語はなかった。文学革命によって白話文学が生まれ、近代文学が形成されていく過程で、このことは文学者たちにとって大きな問題となった。特に初期に盛んに行なわれた西欧文学の翻訳の中で「彼女」にあたる外国語にどう中国語を充てるかは深刻な問題であった。多くの文学者がこの問題を解決すべくいろいろな試みをおこなっている。その中で「她」という文字を考え出したのが詩人でもあった言語学者の劉復だった。魯迅は『呐喊』（1922）の作品では呉語に由来する「伊」を使っていたが、『彷徨』（1924）以後は「她」を使うようになる。田漢と郭沫若がこの問題について議論したというのは興味深い。郭沫若は1920年1月『時事新報・

学灯』に発表した短編小説「鼠災」で、主人公の大学生・平甫を描写する際、第3人称を用いる場合は「他（平甫）」とし、彼の夫人については、「他女人」、「他（他的女人）」、「他（女）」というふうには3つの書き方をしている。だが、『三葉集』の田漢宛書信（2月15日）で、妻のアンナのことを書くときは「她」を使っている。「她」がまだ定着していなかった時期の言語意識を知る資料になる。

- 13 『三葉集』田漢の序文の末尾「本書に収めた書信は、前後を合わせれば例えば一卷の『若きウェルテルの悩み』のごとくである。ゲーテがそれを発表するやドイツの青年の中でウェルテルブームが巻き起こった！『三葉集』が出た後には、我が国の青年の中に、必ずや三つ葉ブームが大いに起こるであろう」を指している。郭沫若の序文は『ファウスト』第一部「市門の前」のファウストの言葉で、それを「代序」として使っている。なお、田漢『三葉集』序文については本翻訳シリーズ『三葉集』その1解説（本紀要、2012年）参照。

- 14 郭沫若は田漢宛2月25日の手紙で「僕たちは同志を集め、『ゲーテ研究会』を組織し、まず彼のあらゆる名著、傑作、また彼についての名家の研究を一切合財紹介し、系統的に研究したらいいように思います」と書いている。郭沫若がこの時期ゲーテに傾倒し、彼の作品に熱中していたことは、郭沫若の宗白華宛ての最初の手紙（本翻訳シリーズ1、本紀要2012年、49-60頁所収）での、ゲーテ賛美の文からもうかがえるが、その中でも彼は「ゲーテの著作に関して、僕たちはできるだけ多く研究し、紹介すべきだと思います。彼の生きた時代（略）は、僕たちの時代ととても似ています！僕たちには彼の教訓を受けとめるべき所が沢山あります！」と書いている。（56頁）

*訳者注として書き加えたものを【 】内に記した。

*郭沫若文中の難解な中国語の語彙について、熊本学園大学・石汝傑教授のご示教を賜った。ここにご厚意に感謝申し上げます。

解説: 本文の翻訳について (岩佐昌暲)

本文は『三葉集』の最後におかれ、長文である。ほぼ全文が、田漢の博多訪問の詳細を宗白華に報告する内容になっているが、今回の翻訳は、その前半である。

田漢と郭沫若は宗白華の紹介で手紙のやりとりをするようになる。田漢が最初に郭沫若に手紙を書いたのが2月9日付。それに対する郭沫若の返書は2月15日である。以後、2月18日田→郭、2月25日郭→田、2月29日田→郭、3月6日郭→田、と二人の手紙の往復が続く。いずれも長文で、内容も多彩で情熱にあふれている。五四時期のおそらく最高の知的水準にあった青年知識人が、当時の思想的・文学的課題と向き合い、それを解こうとしている姿がみえる。その最高の知的エリートである郭沫若と田漢が、ついに顔を合わせる、それを、これも当時最高水準の活字メディアの編集者に報告したのがこの手紙だということになる。

郭沫若は後年、次々に自伝的な回想記を発表し、それが詩、詩劇と並んで郭沫若文学の特色を形作ることになるが、その自伝でよく知られているのが『創造十年』(1932年執筆、同年刊)である。『創造十年』は「私の知っている創造社、もっと適切に言えば、創造社を中心とする私自身の十年間の生活を記録しよう」(同書「発端」)と書かれたものである。また、彼は『創造十年』と『続編』は、いずれも創造社の歴史を書き終えていない。欠落しているのは北伐以後の後期創造社の部分である。「(「学生時代・沫若自伝第2巻」序、『革命春秋』上海海燕書店、1947年5月刊)とも書いており、執筆の重点が創造社の「歴史」にではなく、「私自身の十年間の生活」の記録にあったことが分かる。

1918年夏、岡山の第六高等学校を卒業して博多に着いたことから書き起こされていて、その後の文学活動、文学を通じての留学生仲間(彼らが創造社の中心としてその後の中国文壇をリードしていく)との交流、九大を卒業して帰国してからの苦労などが書かれ、24年再び日本に帰るところで終わっている。創造社の裏面史であり、中国文壇私史とでも評して

いい。

そこには勿論、田漢との交流も書かれていて、彼が博多に来たことなどにも筆が費やされている。ところが、それを読むと、田漢への見方(あるいは感情)がこの手紙に書かれているのとは違うことが分かる。宗白華への報告では、初対面の二人はたちまち打ち解け、熱情的である。しかし『創造十年』現れる田漢と郭沫若の間にはやや隙間がある。勿論、十数年後の日本亡命時代での回想である。無名の貧書生に過ぎなかった二人は国内革命戦争を経てそれぞれ異なる境遇にある。友人に対する見方、評価が変化するのとは当然である。

それを前提にしつつ、では32年の時点で『創造十年』は、その後1947年5月の海燕書店版にも、また1958年8月の『郭沫若文集』第7巻、人民文学出版社、にも若干の文字の訂正はあるが、基本的にそのまま収録されているから、58年時点でと言い換えてもいい)郭沫若はこのときのことをどう感じていたか、それを摘録して解説に代える。底本は『郭沫若全集(文学編)』第12巻、人民文学出版社、1992年9月刊、68-71頁。

僕が田寿昌(田漢)を知ったのは、白華の紹介による。田寿昌と宗白華はいずれも当時の少年中国学会の会員で、五四運動後に生まれた新人である。寿昌も日本に留学し、東京高等師範学校で学んでいた。彼はその頃すでにロシア文学の紹介をやり、また詩人や労働問題について論じたりしていた。僕の知る所によれば、彼は日本文壇の影響を受けていて、同時にいうまでもなく間接的にロシア革命の影響も受けていた。(中略)

寿昌は白華の紹介で僕と文通を始めたのが、その後一九二〇年の三月末に、春休みを利用してなんと東京から福岡に私を尋ねてきた。彼が来たのは、ちょうど僕の第二子博孫が生まれてちょうど三日目だった。僕はカネがないので人を頼めず、家事は一切自分の手でやっていた。彼はわたしのその様子を見て大変失望したようだった。彼はその頃まだ若く、正に意気軒昂の詩人で、人生のなんたるかを分かっていた。まさに僕自身もそうであって、彼が

来て三日目、僕は平然と彼につきそって福岡近郊の名勝地・大宰府に一日遊び、四日目にも彼を案内して福岡市内の名勝に遊んだ。産後わずか五、六日、絶対に安静でなければならないアンナを二人の子供といっしょに家に放置したのだ。そのため後に乳が出なくなり、様々な苦痛が生まれることになった。

(中略)

寿昌の来訪の結果、『三葉集』が生まれた。集めたのは白華、寿昌そして僕の手紙である。寿昌は僕に対して大変失望した。東京に帰る時、京都に立ち寄って、鄭伯奇(1881 - 1979、創造社のメンバー、作家。当時京都帝大生)に会い、彼から僕に会った感想を聞かれた。彼は一言「聞名深望見面、見面不如不見」(名を聞き深く面を見んと望むも、面を見るは見ざるに如かず<名前を聞いて会ってみたいと強く思っていたが、会うより会わない方がよかった>)と言っただけだった。これは後で鄭伯奇が僕に話してくれたことだが、僕は絶対に嘘ではないと信じている。というのは寿昌は僕にもそういう口ぶりをしたことがあるからだ。彼が来た時、僕は丁度お湯を沸かして、産婆が子供の湯浴みをさせに来るのを待っていて、しばらくして産婆も来た。僕は田漢が遠くから訪ねて来てくれたのが嬉しくて、雑用をしながら彼と談笑していた。僕がたまたま「談笑有鴻儒」(談笑 鴻儒有り<談笑する相手は大学者>)と言うと、彼が続けて僕に返した句は、「往来有産婆」(往来 産婆有り<行き来するのは産婆>)だった。彼がこの句を言ったとき、或いは何気なしに口を衝いて出たかもしれないが、だがそれを聞いた僕は少なからぬ侮辱を受けたような気がした。その後、『三葉集』出版の後だが、彼は僕に手紙をくれたときにも、彼の舅の易梅園先生(田漢の妻・易漱瑜の父。清末の中国革命同盟会会員、有名な詩歌結社・南社の社員)が、僕には大変な詩人の天分があるが、惜しいことに煙火の気が強すぎると言ったと書いていた。当時の寿昌は多分、僕が余りにも世俗に関わりすぎ、自重せず、往来するのは産婆や下女、関心の的は日常生活で、こういうふうだと詩の神様が驚いて天の外に逃げてしまうと嫌がったのだろう。だが彼は思

いもしなかった。僕にカネがあれば、こんなことするものか、とは。……『三葉集』は出版後、一時大きく歓迎された。それで寿昌はまた食指を動かし、僕ともう一人の友人を語らって三人の通信をやり、『新三葉集』を出そうと考えた。この提案は僕から拒否された。

この翻訳の作業の経緯は前稿(「我的作詩的経過」と『三葉集』その1, 2, 3)と同様である。(2014年10月)